派遣者番号	R6K19	氏名	藤川 光義
研究主題 —副主題—	英語教育における効果的な「個別最適な学び」 —一人一人の理解や学習進度に応じたICT等を活用した自己調整型の授業デザイン—		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	馬場 哲生
所属	八王子市立館中学校	所属長	井上 竜太

キーワード：個別最適な学び 協働的な学習 自己調整 ICT

要旨： 現在の教育現場では、生徒の多様化等の背景から、個々の生徒の学習進度や到達度に応じた個別最適な学びが求められている。本課題研究は、多様化する生徒一人一人の理解や学習進度に応じた、ICT活用による自己調整型の授業デザインを提案することを目的としている。

本研究では、実態調査や、文献調査を行い、個別最適な学びに関する実施状況・必要性・課題を明らかにした。

課題解決に向け、調査結果をもとにICTを活用した授業デザインを作成した。生徒が学習方法やレベルを選択して個別で取り組む時間を授業内に設定し、学習記録を残すことで、それぞれの進度や学習到達度に応じた授業を行えるだけでなく、自分自身の学びを自己調整できるシステムである点、学んだことを協働学習につなげる取組を取り入れている点が今回のデザインの特徴である。最終アンケートの結果では、生徒の主体性や自己調整力が伸びており、本デザインによる「個別最適な学び」の有効性が明らかとなった。

英語教育における効果的な「個別最適な学び」

――一人一人の理解や学習進度に応じた ICT 等を活用した自己調整型の授業デザイン――

藤川 光義

1. 研究背景と目的

現在の教育現場では、生徒の多様化等の背景から、個々の生徒の学習進度や到達度に応じた個別最適な学びが求められている。文部科学省によって令和4年に行われた「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」では、「学習面で著しい困難を示す」生徒の割合は小中学校で6.5%、また東京都の「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」では、東京都の中学生のうち6.85%の生徒が不登校傾向であることが報告されている。さらに文部科学省による「令和5年度 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」では、日本語指導が必要な児童生徒が69,123人おり、年々増加傾向にあることが明らかになっている。

そういった背景から、生徒たち一人一人の理解や学習進度に応じた学びや学習環境を提供するとともに、自分に合った教材や学習方法を自主選択することができる授業、また、自分の興味のある内容について主体的に学習を進めることのできる授業が必要とされている。

本研究の目的は、中学校英語科教員に対し、「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」に関する理論的な基盤を提供するとともに、その実現に向けたモデルプランを提示することである。

2. 研究の方法

1.実態調査・理論研究	2.実践研究	3.まとめ
<ul style="list-style-type: none">・現職英語科教員と生徒に対しての事前調査・実態調査・先行研究・文献調査・課題把握	<ul style="list-style-type: none">・課題解決に向けたプログラムの実践（7週間）・プレ・ポストアンケート・分析	<ul style="list-style-type: none">・研究の成果と課題・授業デザインの提案・成果の活用方法

3. 研究の成果

3-1 実態調査・理論研究

実態調査では、教員は生徒間の学力差を強く感じているものの、指導の個別化や学習の個性化が十分に行われていないことが明らかとなった。特に、学習進度や到達度に応じた指導方法が分からないことに困難を強く感じながら一斉授業を行っているため、授業のペースついて約3分の1の生徒が、学習ペースが合わないと感じていることが確認された。

また、興味・関心に合った学びができていると感じている生徒が少なく、教員に指定された課題や宿題のみを学習している生徒が多いことも調査の結果から分かった。

次に、文献調査を通して、個別最適な学びの必要性や課題点を調査した。この調査から見えてきた課題として、多くの教員が効果的なICTの活用方法が分からず一人一人に合った課題の指示ができていないことや、個別に学習させることにフォーカスしすぎると、知識を深めることや協働的な学習につながらず、孤立した学びになってしまう可能性があることが分かった。また、生徒が自分の最適な学びについて知り、自己調整をしながら学べるような工夫を授業に取り入れなければならないことも課題として挙げられた。

3-2 実践研究

調査結果から、学校の課題解決に向け、ICTを活用した授業デザインを作成した。作成に当たり、以下の5点を意識したデザインを目指した。

- ① ICTを活用し、いつでもどこでも取り組むことのできる多様な教材の提供
- ② 学習者が学習進度や到達度、特性に応じた効果的な学習方法を選択できる環境の提供
- ③ 学習者が自らの課題を把握し、課題解決に向けた学習ができる環境の整備
- ④ 学習の個性化を意識した、興味・関心に応じた探究的な学習の促進
- ⑤ 協働的な学びにつながる教材の活用

以上の5点を意識した仮授業デザインを作成し、修正を行いながら7週間の実践研究を行っ

た。その後、最終アンケートを集計・調査後、最終デザインを作成した。

4. 研究のまとめと課題

生徒が自分自身で学習方法やレベルを選択し、個別で取り組む時間を授業内に設定する。さらに学習記録を残すことで、それぞれの進捗や学習到達度に応じた授業を行えるだけでなく、自分自身の学びを自己調整できるシステムであることや、自宅学習に関してもそれぞれが選択した宿題に取り組み、学んだことを協働学習で深めることができる点が今回のデザインの特徴である。アンケート結果では、「以前より主体的に授業に取り組めるようになった。」と答えた生徒や、「授業のペースが自分に合っている。」「自らの学びを振り返り、何が苦手で、何をすればよいか分かるようになった。」と答えた生徒の割合が増えており、本デザインによる「個別最適な学び」の有効性が明らかとなった。自宅学習についても「自主選択できる自宅学習を通して、自分の英語力は伸びたように感じる。」という問いでは90%を超える生徒が「当てはまる。」「とても当てはまる。」と回答している。自由記述では「苦手なところを把握し、そこを重点的に学習できた。」「何回でも取り組めるため、くり返し行うことで自分の弱いところがどんどん分かり、その後の学習に繋げやすいと思った。」などの回答があり、自宅学習への有効性も明らかとなった。また、教員側が抱えていた、「ICTの活用方法が分からず一人一人にあった課題を提供できない。」という課題に対し、ICT教材の使い方や、実際に授業で活用できるリンクを貼り付け、モデルプランを提示することで、課題解決につながるデザインを作成した。

5. 成果の活用方法

今回作成した授業デザインによって、多様な学習ニーズへの対応が可能となり、学習者中心の教育の実現性が増すと考察する。また、生徒が自らのペースや学習到達度に応じて学習方法を選択できる環境を整備することにより、目標に向かって自ら課題を見付け、課題解決に向けた方法を探し、実行する自己調整力の向上を促進することが考えられる。中学校英語に関する個別最適な学びの具体的な実践例や授業プランが少ないため、モデルプラン、先行実践として提示することが教育的示唆として挙げられる。

6 参考文献

東京都「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」

文部科学省（2023）「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」

文部科学省（2024）「令和5年度日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」

文部科学省（2024）「令和6年度全国学力・学習状況調査の質問調査の結果について」